

1

杉浦隆夫は簞笥に仕舞つてある妻の着物を凡て処分することにした。

もう妻が戻ることもあるまいし、仕立て直して再利用することも考え難かつたから、殆ど躊躇うこともなかつた。ただ、抽匣を開けると云う行為自体には大層抵抗があつて、杉浦はその刹那、恐怖のあまり指先の力が抜けて、取っ手の金具をかたかたと鳴らしてしまつたのだつた。

そのかたかた云う音が。

杉浦の恐怖心を一層逆撫でした。

——馬鹿馬鹿しい。

本当に馬鹿馬鹿しいと思つたから、杉浦は勢い良く抽匣を開けた。

勿論妻が着ていたものに間違いはないのだが、それは甚だしい加減な記憶であり、だいいち杉浦にはそれが春物なのか夏物なのかさえ区別がついていなかった。

ただ妻には十二分に未練があつた。

その妻の残した品なのだから、それを手にして幾許かの感傷が湧くのは当然と云えば当然だろう。

しかし、それにしたつて着物の一枚一枚に対して大袈裟な思い出がある筈もなかつたのだ。そもそも杉浦が妻と過ごした時間は豪く短かつたのである。だからその胸の痛みにしても、本当のところは妻との記憶の残滓なのか、久方振りに吸い込んだ微かな樟腦の刺激臭の所為なのか、それすらも定かではなかつた。それは寧ろ、喪失感に近い感情なのかもしれないなかつた。

質屋にでも持つて行けば幾価かにはなるのだろうし、虫が食つていることもないだろうから、欲しがる者もいるかもしれない。

着物は畳まれ、帖紙に包まれて実に丁寧に仕舞われていた。思い返せば妻は必要以上に几帳面な女だつたのだ。杉浦はそんなことすらすっかり忘れていたようだつた。

いずれにしても——

着物が剥き出しになつていなかったお蔭で、杉浦の不条理な恐怖心はやや鎮静化した。

そつと紙を捲つてみる。

見慣れた柄が覗いて、胸の奥が少しだけ痛んだ。

大した数ではないが、一枚一枚に過ぎ去つた時間の残り香があるような、そんな錯覚を覚えた。

——これは慥か。

妻があ頃善く着ていた——。

懐かしい、臙げな記憶を辿る。

あ頃——。

漠然とあの頃などと思うのだけれど。それが果たして何時のことなのか、杉浦にはまるで思い出せていない。

だが金に換えると云うのも何だか厭だつたし、他人に袖を通させるのは何となく妻に悪いような気がした。

——袖を通す。

その言葉が再びの恐怖を喚起した。

そう声に出して云つた訳でもないし、心中明確にその語句を想起した訳でもないのだが、着物の袖から白い手がぬう、と伸びている情景だけが鮮烈に脳裏に浮かんで、気がつくると杉浦はわあと声を上げ、手にしたそれを畳の上に放り出していた。

慌てて抽匣を閉じる。

畳の上に一枚だけ着物が残つた。

暫くそうして、それから少し笑つた。

冷静になれば一連の杉浦の行動は実に無意味で、そのうえ滑稽だつたからである。簞笥だの着物だのそんなものが怖い道理はどこにもない。そんなことは充分解かつている。解つてはいるが——。矢張り着物は凡て捨てようと思つた。

もう厭——。
 だつたらうか。
 それとも。
 もううんざり——。
 だつたかもしれぬ。
 妻が最後に発した言葉である。
 杉浦は思い出している。
 妻が家を出てからもう半年は経っている。その、最後の言葉を聞いたのはそれより更に数箇月も前のことだ。会話をした記憶となると更に遠い。
 その頃、杉浦と妻の關係は完全に破綻していた。家を出るに至つた妻の気持ちなど、所詮杉浦などに解る訳もない。だが想像するのは簡単だつた。

人としての義務をすっかり放棄して、日日廢人のように無為に過ごしていた後ろ向きの杉浦が、常に前向きだつた妻には我慢ならなかつたのだろう。去年の夏まで杉浦は小学校の教員だつた。結婚したのは矢張り去年の春だつたから、所帯を持つてから杉浦が社会人としてまともに就労した期間というのは、精精一二箇月と云つたところだつただろう。教師を辞めてからと云うもの、杉浦は妻を含むあらゆるものを拒み、拗ねるように、頑なに何もせずに過ごしたのだ。
 そうして考えてみると——そんな男との暮しは常人ならば耐え切れまい。厭にもなろうと思ふ。こうなつたのは寧ろ当たり前のことで、何の不思議もないことなのだ。
 杉浦は庭に目を遣る。
 妻の言葉が甦る。
 貴方が解らない——。
 ——解らないだろうな。

職を辞するにあつて、杉浦には例えば切迫した事情があつた訳でも、所謂一身上の都合などがあつた訳でもない。かと云つて教育者としての自信を喪失したとか、現在の教育制度に絶望したとか、そんな大仰な大義名分があつた訳でもなかつた。
 それは実に朦朧とした、あつて罔きが如き理由なのだつた。
 ある日突然。
 子供が怖くなつたのだ。
 それまで杉浦は、聖職者として然したる理想を掲げることもなく、かと云つて義務を放棄するような無頼教師でもなく、云つてみればただ為すがままの職業教師だつた。それが生業なのだから日をを得ないと、ただだからとそう思つていた。子供が好きと云う訳でもなかつたが、接してみれば彼等も意外につき合い易く、だから仕事もそれなりに熟せた。子供と云うのは煩瑣いけれど可愛いものだ——結局そのぐらいいは思えるようになっていたのだつた。

そんな杉浦は生徒達に対して厳格な管理者とはなり得なかつた。それでいて子供等とは進んで善く遊んだから、大層生徒に人気のある教師だつた。
 それも、今となつてはただの優越感に根差した幻想に過ぎなかつたように思ふ。
 云つてみれば一種の現実逃避だ。
 考えてみれば幼い生徒達が己より無知で無力なのは当たり前のことで、彼等と仲良く出来たのは自分が圧倒的に勝つていてと云う慢心から来る余裕があつたからに外ならない。にも拘らず叱ることをしなかつたのは、もしかしたらその慢心すらも妄想に過ぎぬと云う可能性——自分は子供を叱れるような覚者ではなく、子供等より更に劣つた人間であると云う可能性——を、生徒との關係から若干なりとも嗅ぎ取つていたからに外ならない。
 それは、正にその通りだつた。
 無邪気と云う凶器は実に容赦がない。
 ——あの日。

あの日、幼い子等は杉浦に群がるようにして遊んでいた。耳を突くような喧声けんせいが右へ左へと忙まわしく移動し、視線を向ける至るところに愛らしい笑顔があった。

最初に杉浦の頸くびにぶら下がったのはどの子だったのだろうか。勿論もちろんその程度のことをされたところで杉浦は愛想良あいさうく、まるで馬鹿のように笑っていた。

子等は増長ぞうちようした。

次々と杉浦の頸に可愛らしい掌てのひらが飛びついた。

とても重かったし、やけに痛かったのだが、それでも杉浦はまだへらへらと笑っていた。

子等は更に増長した。

苦しくなった。放すまいとする子供の細い指が頸に食い込んだ。放せ、と云う高圧的な台詞せりふはどうしても云えなかった。のみならず、そのうち声すらも出せなくなった。

杉浦は子等を振り解ほどこうと弱弱い反抗を暫しばく続けた。

しかし、そんな迂遠うげんな抵抗が興奮した幼子おとなごに通じる訳もない。止せ、止める——それは、笑い乍らな口にする台詞ではない。勿論通じなかった。

——通じない。

自分に纏わり付いている小さな生き物達には、自分の言葉は通じない。そこに至つて杉浦の中にいきなり、どこか爆発的な感情の発露はつろがあった。杉浦は乱暴に身体を揺ると、臍躁ヒスアツク的な奇声を上げ子供達を振り飛ばした。

飛ばされた子供達が悲鳴を上げた。

——拙ますい。

——怪我をさせたか。

杉浦は咄嗟とつさに社会人としての理性を取り戻した。子供相手にむきになって、乱暴を働いて、もし怪我でも負わせたりしたなら、その時はどんな云い訳も利かぬ——。

だがそんな懸念けんねんもほんの一瞬のことだった。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。